

書評という文学のジャンルがあります。新聞の読書欄や出版社のPR誌に書かれるものから、かなりの長さで書かれるものまで、さまざまあります。書評というのは、ある本の内容を紹介、批評した文章のことですが、その本の内容をあまり紹介しないで、ただ自分の意見感想を書き連ねる、という人もいます。字数の制限などあってそうなるのかもしれませんが、それだけでもないと思います。限られた字数の中でも、その本の内容を、的確に紹介し、かつ自分の意見も鮮明に述べる、こういう書評に出会ってその力量に驚くことも少なくありません。その本に対する自分の意見というのも大事ですが、本の内容を的確に紹介できる、これがどれほどの力量を必要とすることか。簡潔で内容を豊かに要約できる人は、意見も的確であることが多いのです。

ステファノの説教を読み進んでいます。彼の説教は読んでわかるように、旧約聖書の要約です。彼がここで説教に語るのに必要と思われる部分を的確に要約し、メッセージを語ろうとしている。いや逆かもしれません。彼は旧約聖書から語るべきものとして示されたものを、聖書に即してここで提示しているだけなのかもしれません。彼はアブラハムについて語ります。ヨセフについても短く語ります。そしてモーセについて語ります。このモーセについての要約、引用、紹介も、ステファノならではのものです。

ステファノはまず、モーセが生まれたときのことを語ります。ヨセフがエジプトの大臣だった時に食料を求めてエジプトに行ったヤコブたちが時の王の配慮により、エジプトに移住することになりました。しかし、王の代替わりが進む中で、イスラエルの民は奴隷としてエジプトで働くことになり、やがてイスラエルの乳飲み子を殺すことにまでなっていく。モーセはこうした時代に生を受け、いったんは捨てられたものの、王女によって拾い上げられ、エジプトの教育を受け、王宮で育つのです。モーセが四十歳になった時、彼は自分がイスラエルの民であることを自覚して苦しめられている同胞に対する使命があると思い始めた。しかしその使命感によって何事か始めたときに、彼は自分自身の情けないほどの弱さに躓いてしまう。人の言葉に立ち直れないほど傷つき、逃げ出してしまふ。ミディアン人の荒野に逃げて、そこで生涯隠れ通すつもりになっていた。事実彼はミディアンの地で40年にわたって暮らすのです。ここで

彼は何を思い、どう過ごしたのでしょうか。モーセ80歳にならんとするとき、彼は神の声を聞くのです。

アブラハムは75歳で新たに旅立ちました。モーセは80歳で、神の声を聞く。そして神からの使命によって派遣され、新しい歩みを始める。

ステファノはどうしてモーセのことを語り始めたのでしょうか。

モーセは40歳の時に自分なりの使命を感じて歩みだそうとした。それはモーセ自身の思いによるものだった。そしてそれゆえに、モーセ自身が行き詰れば、逃げ出すようなものだった。モーセが80歳になって神の声を聞いた、というのは、あまりにも不思議なことです。アブラハムの時と同様説明できることではない。しかし、人々が指導者として拒否したモーセを神がたて、神が遣わされるのです。そして以後40年にわたって、モーセは荒れ野でも不思議な業を神によってなし、人々との間に立ち、いのちの言葉を受け、それを伝える、という役割を担っていくのです。それは、先々週我々が聞いたアブラハムのうちに響いた促し、神からの語りを聞いた、という不思議と、まさにつながるものです。

ステファノはそのことに目を凝らしています。旧約聖書をしっかりと辿って要約し、そこに語られている神の言葉をイエス・キリストとの出会いの中で聞く。わたしたちにとっても聖書を読む、とはそういうことです。でなければわたしたちの生きる力とはならない。アブラハムと、モーセの生涯がどのようなもので、そこにわたしたちは神のどのような働きを読み取り、自分自身への神の言葉を聞いていくのか。モーセという人は、不思議な生涯を送った人です。わからないことも多い。しかし、あるとき、自分の判断、自分の思いで同胞の民を救おうとした。だがそれはすぐに行き詰った。暗礁に乗り上げた。だから彼は逃げた。しかし、40年たって逃げたモーセに神は語りかける。いや、40年の間神は語りかけていたのかもしれないけれど、40年たってモーセにその声が聞こえた、ということです。つまりその時モーセは神によって砕かれた。砕かれたから神の声が聞こえたのです。その砕かれたモーセを神は用いられた、とステファノは語っているのです。

しかし、イスラエルの人々は、モーセに逆らい、自分たちの導く神々をつくってくださいとまで、アロンに願うのです。そして、牡牛の像をつくって拝み始めていく。だがモーセは、神の言葉を伝えることをやめない。自分の意志で動いていないからです。神の意志によってたてられたことを受けとめているからです。

ステファノの説教は、二つのことをここで語っています。

一つは、神がモーセをご自分の働きのために立て、用いていかれた、ということです。それは彼の意味ではない。神の意味だということです。神の言葉に聞き、それによってたてられ、モーセは、歩んだのです。

二つは、けれども先祖たちは、この人に従おうとせず、彼を退け、エジプトを懐かしく思い、アロンに「わたしたちの先に立って導いてくれる神々を造ってくれ」といったということです。神々を造ってくれ。自分たちに都合のいい神、自分たちが納得できる神、自分たち本位の神を造ってくれ、といったのです。

この二つのこととの関係を考えたいのです。

イスラエルはこれまで、偶像礼拝ということはしてこなかったのです。偶像を造る、というようなことなど別世界のことだと思ってきたのです。アブラハムが神の言葉に聞いて、カルデアのウルを出て、神の言葉によって歩みだす。そういう信仰を形作ってきたのです。神の言葉によって生きる、言葉を神の意思として受け止め、その言葉に応答して生きる、そういう信仰を具体的に生きてきたのです。

それがあるとき、神々を造ってくれ、と言い出したのです。偶像を造ってくれ。ある人がそのことを「この民族の歴史としては、画期的な墮落である。」といているのですが、まさしくそうなのです。

どうしてこんなことを言い出したのか、まさに聖書をよく読む必要がありますが、エジプトでの生活の中で、偶像礼拝というものに触れていったからだと、いう人もいます。確かにそうかもしれないのですが、根本的には、不安があったのではないかと、思います。神が語り給う、そこからすべてが始まる。だから今日も神の言葉に聞こう、聞きたい、聞かせてください、という祈りをもって応答していく。それが神を礼拝していくことです。偶像とは、神の言葉以外のもので生きようとするということです。つまり人間が作り出したもので生きようとするということです。お金であろうが、社会的なものとか、神の言葉より、人間が作り出したものの方が確かだ、ということです。しかし人間が作り出したものであることは、根本的に不安を抱えている、ということになるでしょう。

モーセは神の言葉を聞いて80歳にならんとするとき、歩みだした。

イスラエルの民は、神の言葉に聞き従って生きることから、偶像へと向かっていった。ステファノはこのモーセとイスラエルの民の姿を鮮やかに描き出す。

そしてそのイスラエルの民に対する神の態度を指し示す。それが42節、4

3節です。これはアモス書からの引用ですが、逮捕され、最高法院での尋問に答える中での聖書からの引用です。神が彼らの偶像礼拝を、するがままにしておかれる、ということと、その罰として、バビロンのかなたに移住させる、というのです。

モーセは神の言葉に聞いて、歩み始め、人々にその言葉を宣べ伝えた。だがその言葉に聞くことから離れ、偶像に向かう人々がいる。それは、今ステファノがイエス・キリストの信実において告げられる神の言葉を宣べ伝える中でも起こっていることでもある。彼はそれを、語っているのです。

ステファノは神の言葉に聞いて生きることの難しさをここで語っているのだろうか。確かにそうなのかもしれない。モーセ自身がそうであったように、自分の意志や自分の思いが先行する限り、神の言葉は本当の意味で聞こえないということなのかもしれない。40歳のモーセは自分で何かできると思っていた。だが、彼はその自分から逃げ出した。80歳のモーセは、自分ではもう何かができるという思いはなかった。その彼に与えられた言葉をモーセは聞くことができた。自分で何かするのではなく、神の言葉によって生きることを彼が受けとめ始めていたからであろう。人間にとって神の言葉を聞くことを最後まで邪魔するのが自分である、ということは何ともやりきれないことです。神に向かい、神に砕いていただくしかないことを心に深くとめて歩んでいきましょう。